

土井健司著 『神認識とエペクタシス』

(創文社一九九八年二月一〇日刊 A5 判四〇六頁 六二〇〇円)

芦名定道

キリスト教思想研究にとって古代教会とその思想は特別の位置を占めている。現在のよ
うな制度や思想(神学)をもったキリスト教が明確な形をとったのは、二世紀から五世紀
にかけての聖書の正典化と正統教義の形成の時代、すなわち古代キリスト教においてであ
った。それゆえ近年の世界的な教父研究の活況は当然のことと言える。しかし、少数の例
外は別にして、日本のこれまでの教父研究は海外の研究の紹介にとどまっていたように思
われる。その中で、今回取り上げる土井健司氏の『神認識とエペクタシス』は古代キリ
スト教思想の中でも中心的一人に数えられるニュッサのグレゴリオスを本格的に論じた研
究としておそらく我が国最初のものであり、その水準も現在の世界的レベルの研究に比べ
て遜色のないものと言えよう。

本書の内容に入る前に、その特徴を二点指摘しておきたい。まず、本書は著者自身が述
べているように、京都大学に提出された著者の博士論文に加筆、訂正を加えたものであり、
グレゴリオスについての専門研究書であることが意図されている。それは、主要な先行研
究の批判的総括に立って、原典テキストに基づいたキーワードの徹底した分析を行いその
実証的証拠にしたがって考察を展開する、という本書のスタイルに現れている。読者は注
などに引用された原文(特に第四章)によって、著者の議論を検証することができるであ
らう。このように、本書はグレゴリオスについての啓蒙的著作ではない。しかし他方、本
書が狭い意味でのグレゴリオスの思想内答の解明を超えてキリスト教思想全般に通じる問
題提起を行っている点にも注目する必要がある。読者はそれぞれの専門研究との密接なつ
ながりを随所に確認することができるであろう。

以下、「補遺 パレーシアー「自由に語ること」」と英文概要は書評の範囲に含まず、
また訳語や言葉遣いなどの細かな問題点よりも、本書の中心的主張に焦点を合わせて書評
を行うことにしたい。これは書評者の能力上の制約というだけでなく、それが本書にふさ
わしいと考えるからである。

まず、本書の構成を確認しておこう。本書は、グレゴリオスの神認識に関する神秘主義
か否かという従来の問題設定を批判的に論駁しつつ「グレゴリオスの神認識はエペクタシ
スの神認識である」ことの論証を目的としている。その意味で第五章「エペクタシス」こ
そが論述全体の中心となる。しかし、著者は先行研究(ディカンプ)が立てた低い神認識か
ら高い神認識という順序をあえて踏襲し、それによって「従来の研究を考慮し、それらと
の対決」(三二一頁)を試みている。これが、「働きからの神認識」(第二章)、「鏡におけ
る神認識」(第三章)、「暗闇における神認識」(第四章)という本書の構成順序に他ならな
い。従って、議論はテキスト自体の厳密な読解によって先行研究と対決しつつ、第五章お
よび結論へと収斂することになる。

次に各章の内容を簡単に概観してみよう。

「序論」では、本書のテーマ、問題設定、そして方法論が示される。その前提となるの
が一九世紀以降の研究史の批判的考察である。それによって、これまでの先行研究を規定
していた議論の枠組みが神秘主義であること(ダニエルーはグレゴリオスの神認識が神秘

主義であると主張し、ミュレンベルクは神秘主義であることを否定する)そしてグレゴリオスの神認識には低次から高次への諸段階が区別されてきたこと(ディカンブは「働きからの神認識」「鏡における神認識」「暗闇における神認識」「天上における神認識」「エペクタシス」の諸段階を、ダニエルは光、雲、暗麗の三段階を論じている)またバルタザール、ダニエル、ミュレンベルクらの研究によってもエペクタシス概念と神認識との関係は解明されていないことが、確認される。著者はこうした研究史の概観に立って、グレゴリオスの神認識がエペクタシス的神認識であることの論証を試みるのである。

「第一章 グレゴリオス以前の神認識」では、グレゴリオスの神認識の問題を論じるに先立って、その前史となるグレゴリオス以前のギリシャ哲学(プラトン、アリストテレス、フィロン、プロティノス)とキリスト教(新約聖書、オリゲネス、エウノミオス)の神認識が概観される。なお、この章の議論は後にギリシャ的神認識とキリスト教信仰との相違および関係が論じられる際の前提となるべきものであるが、この点は必ずしも明確にされていない。

「第二章 働きからの神認識」では、グレゴリオスの神認識論で「神の働きから神を知る」というギリシャ的な自然神学を肯定すると通常解されるテキストが検討される。著者は「グレゴリオス自身がこの神認識をギリシャ哲学的でもあると認めている」と、つまりグレゴリオスのテキストにはギリシャ的な自然神学と連続する神認識の記述があると述べつつも、「知恵=キリストという図式」に基づいてギリシャ的神認識を「被造物からキリストを知るという神認識」へと改鑄していることのうちにグレゴリオスの独自性を求める。つまり、グレゴリオスのテキストで「働きからの神認識」の例と解されるものは、ギリシャ的好奇心に基づく神探求の肯定としてではなく、キリスト教信仰(エペクタシス的探求)への転換点として理解されねばならないのである。

「第三章 鏡における神認識」では、グレゴリオスのテキストにおける「鏡」の用法の厳密な分析に基づいて、従来の諸説の乗り越えが試みられる。その結果明らかにされるのは、グレゴリオスでは「鏡」の用法は何らかの伝統に依拠したものではないこと、従ってアタナシオスのような神認識の表現のための「鏡」の術語化はグレゴリオスには認められない(「鏡におけるように神を見る」とは言わない。「鏡」は「神の似像」のある観点を説明する比喻の一つである)むしろグレゴリオスはアタナシオスの用法を故意に避けている、という点である。その論拠は、グレゴリオス本来の神認識であるエペクタシス(神への魂の動的運動)を表現するのに、「鏡像の静止性」は、ふさわしくないという判断である。『至福論』のテキストは「鏡における神認識」のテキストとしてではなく、マタイ伝五章八節(「清らかさ」「神認識」「至福」の結びつき。清らかになった自己・心を通して神を見る。神を映し出す自己)の解釈として読まれるべきであると結論される。神の似像とはエペクタシスの運動の中で「魂の中に刻まれていくもの」なのである(一六一頁)。

「第四章 暗闇における神認識」は、「暗闇」概念の用法の分析から議論が始められる。その結論は、モーセの「暗闇」で問題となるのは理性的把握に対する神の不可把握性(無限性 超知性主義)と信仰による把握(キリストとの出会い)、つまりギリシャ的認識からキリスト教信仰への転換である、ということである。暗闇は理性的把握からキリストとの出会いへの移行の分岐点であり、それゆえ信仰によって開かれるキリスト教的神認識の対象は「哲学者の神」ではなく、キリストであるとされる。このように、本章においても、

「暗闇における神認識」はエペクタシスの神認識を指示しているという第二、三章から一貫した解釈が展開されている。注目すべきは、暗闇のテキストで問われるのが「ギリシャ的探求の後の「信」である。働きからの神認識において重なっていたものが、ここでは階層的に並んでいる」(二一三頁)と「神秘体験の有無は問題ではない。むしろ神秘体験によって「頂点」に至ったと考えるならば、かえってそれは障害になるであろう。グレゴリオスにとって重要なことは不断の前進、即ちエペクタシスである」(二三四頁)という二つの議論であろう。前者については後に論じることにして、ここでは後者の「エクスタシーからエペクタシスへ」という指摘が、著者がこれまでの先行研究に対して開いた新たなグレゴリオス理解の核心点の一つであることを強調しておきたい。なお、著者が、神秘主義一般についてどのように考えているかについては、二三九～二四六頁の補遺を参照いただきたい。

「第五章 エペクタシス」のテーマは、「グレゴリオスの神認識論全体を解く[鍵]」であるエペクタシス論自体である。まずエペクタシスに関して確認されるのは、「永続する前進」「不断の前進」(四八頁の注五五も参照)という表現に現れているような、運動をそれ自体として有意味で価値あるものとする思想である。完全な生とは到達された状態ではなく動態自体であり、この不断の前進は被造的存在固有の無限性(可変性=時間拡張性、神の無限性とは区別される時間における超越)であると著者は解釈する。グレゴリオスの引用する聖書の箇所でのこのエペクタシスの神認識にとって重要なのは、出エジプト記の三、二〇、三三章の一連のモーセと神との出会いのテキストとピリピ三章一三節である。いずれにおいても大切なのは、エペクタシスが単なる神認識としてではなく、「神に従う」「後を追う」というキリスト教的生あるいは人間存在の在り方として捉えられている点である。モーセは神を直接見ること(顔と顔を合わせて)を願望するが、その望みはかなえられず、モーセは神の「背中」を見、神の後に従うことを許される。この「顔」から「背中」への転換は、誤った願望から真の神認識への転換であり、著者はこれを他者認識をモデルとした「関係としての知」と呼ぶ。他者を知るとは知り尽くすことではなく(知の未完結性)、他者との正しい人格的關係に生きることである。ここに再度、「ギリシャ的認識からのキリスト教的認識への転換」が確認される。このような関係としての知(エペクタシス的前進)において、キリスト者は「神の友」として神への無限の歩み(神へ向かう動的運動としての「神の似像性」)を続けるのである。

「結論」においては、これまでの議論がもう一度圧縮された形で示される。グレゴリオスの神認識論はエペクタシスの神認識でありギリシャ的探求方法(好奇心、理性的認識)の超克におけるキリスト教的探求に他ならないこと(顔から背中への転換)、グレゴリオスの言うエクスタシスとはいわゆる神秘経験の事柄ではなくエペクタシスとして解釈されるべきこと、そしてエペクタシスの神認識は「他者認識をモデルとした認識論」として展開されるべきこと、これらが本書の中心的主張であることが確認できるであろう。

次に内容的な論評に移りたい。しかし、紙面の制約もあり、扱おうるのは著者の中心的主張に関連した事柄に限られる点をご了解いただきたい。

研究史の分析について。著者は一九世紀以降の欧米の研究に限定して研究史の概観を行っているが、東方神学の伝統におけるグレゴリオス解釈、例えばウラジミール・ロース

キィなどのグレゴリオス論は、本書の立場との関わりでどのように評価できるのか、あるいは現代の組織神学において議論の典拠として引用される際のグレゴリオス理解（パネンベルクやモルトマンなど）は研究史の中にどのように位置づけうるのかなどについて気になるのは書評者一人ではないだろう。研究史の概観に明確な範囲の限定があるべきなのは当然としても、一九世紀以降の欧米の教父研究以外の文脈にも一定のめくぱりを行うことは無理な注文であろうか。著者の今後に期待したい。次に構成について。「エペクタシス論については第五章で扱うことになるが、論述の必要から次のことは指摘しておきたい」（一五八頁）とあるように、五章での議論が先取りされることによって論述が進められている箇所が見られる。これはその当該箇所の意味を取りにくくすると共に（一五八頁後半など）、場合によっては本書の議論全体が循環論法に陥っているとの疑念を生じる。

エペクタシスあるいは超越性について。著者は神の無限性・超越性（神の本性は把握不可能）に対して、人間の水平方向の超越（＝非完結性、開放性）をグレゴリオスの人間論としてクローズアップしている。それは神へと向かう上昇的な魂の運動であり、エペクタシスの思想はこの魂の運動・動態自体に価値を認める思想であった。著者も指摘するようにこの運動自体の有意義性という議論は近代人にはわかりやすい考えであり、キリスト教的勤勉さをよく表現していると言えるかもしれない。その上で、「ではそもそもエペクタシス的前進の中身あるいは質はどのようなものなのであろうか」と問いたい。とくに気になるのは、「安息」との関係である。たとえ神秘経験であったとしても到達された状態にとどまることなく不断に神に向かって前進する魂の運動にとって、創造の完成としての安息はどんな関わりをもつのであろうか。それは終末の事柄であって信仰者の現存在には無縁のものなのであろうか。グレゴリオスは「創造の7日目」についてどんな解釈を行っているのであろうか。このように考えると、すでに本書において示されているように、研究は神認識から人間論や存在論を通して神論あるいは創造論へと進められざるを得ないことになる。現代の組織神学でグレゴリオスが評価されるのはこの点においてであり、それは東方神学の伝統においても同様のように思われる。

ギリシャ的理性的神認識からキリスト教信仰（神との人格的關係）への転換、ギリシャ的探求（好奇心）の否定・転換、あるいはギリシャ思想のキリスト教化という主張は、ハルナックの有名な命題（キリスト教信仰のギリシャ化）の一面性をグレゴリオスについての実証的研究によって論駁するという意味を持っている、ハルナックの命題はそれが提出されて以来同世代あるいは次世代の研究者（トレルチ、ティリッヒらを含めて）によって様々な批判がなされてきたものであり、著者の議論はきわめて明解である。しかし、「この暗闇のテキストにおいては、明らかに「信」の領域が問題になる。それはギリシャ的探求の後の「信」である。働きからの神認識において重なっていたものが、ここでは階層的に並んでいる」（二一三頁）という主張については疑問も少なくない。グレゴリオスはキリスト教偶仰の階層的な前段階という以外にギリシャ思想固有の意味を認めていないのか。あるいは、ギリシャ的探求はキリスト教信仰に至る不可欠の前段階ということになるのか。ここでの神認識の議論は確かにギリシャ的教養を自らのものとした神学者たちの事柄であっても、大衆としてのキリスト者の信仰とどのように関係するのか。ギリシャ的探求の後に次の階層として位置する神認識の神とは、確かに哲学者の神ではないとしても、神学者の神となるのではないか。おそらく、ギリシャ的探求からキリスト教信仰への転換の意義

を明確化するには、著者が「過度のギリシャ的なものからキリスト教を守る」というグレゴリオスが置かれた歴史的状況について述べている問題（二八七頁）をもっと積極的に展開することが必要になるのではないだろうか。

ギリシャ的探求からキリスト的信仰への転換という問題連関で論じられた「知恵 = キリスト 被造物からキリストを知る神認識」の議論は最近の新約学（イエス論）との関わりで興味深い。旧約聖書の知恵思想から知恵の教師イエスを経て教父に至る思想展開の中にグレゴリオスのこの議論を位置づけたらどうなるのであろうか。

グレゴリオスはモーセやパウロについては神秘経験を認めているが、グレゴリオス自身には神秘経験がない、さらにはグレゴリオスは神秘経験を重視しない、という議論は、本書の基本的主張であり、それをどのように論証できるかが本書の価値を左右するといっても過言ではない。それだけにこの問題をめぐる著者の論考は緻密であり細部まで行き届いたものとなっている。従来のグレゴリオス研究が「神秘主義か否か」の枠組みに縛られており、そこにエペクタシス論を正当に理解できない原因があるという議論は説得力があり、またキリスト教信仰にとって重要なのは神秘的合一といった狭義の神秘経験の有無ではなく不断の前進であるという見解はキリスト教信仰の核心をついていると言えよう。しかし、これでキリスト教信仰と神秘主義の関係（グレゴリオスの神認識についても）は議論し尽くされたのであろうか。例えば、「言葉の最も広い意味での神秘主義とは、宗教経験の直接性、内面性、現在性への衝動に他ならない」（トレルチ）としたとき、信仰か神秘主義かという問題設定はあまりにも限界が多すぎるように思われる。グレゴリオスの神認識に関して神秘主義的要素を積極的に評価することはまったく不可能なのであろうか。

グレゴリオスにおいては「鏡における神認識」というものは存在せず、むしろ「アタナシオスの用法を故意に避けている」、鏡は神の似像についての一つの比喻であるという著者の議論は、先行研究を乗り越えるものとしてグレゴリオス研究にとってかなり重要な指摘であるように思われる。しかし、同時にその論拠がもっぱら「鏡像の静止性」がエペクタシス的動態にふさわしくないという点に求められるのであるとするならば、この議論はまだ十分な説得力を獲得するに至っていないと言うべきではないだろうか。ここでの「鏡像」が金属鏡であるとしても、鏡像が静止的であると言い切ることは原理的に可能であろうか。テキスト自体からもっと直接的な論拠を示すことが必要であろう。

他者認識モデルをめぐる一連の議論（顔から背中への転換、キリストに従う、人格的關係性と知識との関わりなど）は、現代キリスト教思想の主要テーマの一つであり、きわめて興味深い。しかし、聖書的伝統に立って「顔」「他者」の問題を西洋の存在論的思惟の批判として展開するレヴィナスの議論を著者はどう考えるのであろうか。「顔」一つをとっても考えるべき問題は多くあるように思われる。

最近の日本の教父研究においては将来の研究をリードできる若手の研究者が育ちつつあり、本書の著者もその一人である。冒頭でも述べたように教父研究はキリスト教思想研究の重要な基盤であり、著者には本書を起点にしていっそう充実した教父研究を進めることが期待されるであろう。